

特集

省察的実践者を育む

ショーンからの提起とともに

確立された技術を学び、実践に応用する、という従来の「専門職」観を脱却し、自身の行為を、変化する状況のなかで振り返りながら実践していく、という新たな専門職の実践「省察的実践」を打ち立てた『省察的実践とは何か』（2007年）、そして2017年に翻訳が刊行された『省察的実践者の教育』は、世界の教育学・看護教育学の論文でも膨大な引用数を誇ります。著者であるショーンは、現在もっとも影響力をもっている学習理論家の1人だと言えるでしょう。

しかし同時に、ショーンほど誤解されている理論家もないかもしれません。ショーンの著作に「正解」や「マニュアル」「わかりやすい定義」を求め、それを学んで応用しようという、多くなされているこの読まれ方こそ、まさにショーンが否定しようとした、古い専門職の姿勢に他ならないからです。ショーンを読むということは、語られた事例に自身の実践も照らし合わせながら、実践の意味、また実践の背景となった、思考のフレームを組み替えていくことを意味しています。そのような省察によってこそ、専門職としての学びが得られることが、ショーンの重要な提起だといえるでしょう。

今回の特集では、できる限り、ショーンの提起した問題意識を引き継ぐべく、ショーンの思考の流れを確認していくと同時に、複数で実践を語り合うことで照らし合わされる省察の事例を掲載いたしました。皆さんの探究を誘うきっかけになれば幸いです。